檀一雄のこと（その二）

――――足利ゆかりの文豪

図書館係　阿部健治

前回も少し触れたが、足利高校には檀一雄の詩碑がある。そこには『虚空象嵌』という詩が刻まれている。「象嵌」というのは、金属の地を彫り込み、そこに別の金属を切って嵌め込む細工物で、刀の鍔や櫛などの名品が数多くある（ネットで画像検索してみて。とても綺麗。）。従って、「虚空象嵌」とは、たぶん、「何もない宙空に美しい模様を描く」という意味だろう。では、何によってそれを描くのか。それはもちろん「**夢想する力**」によってである。

この夢は／白い頁に折りこめ／ああ／この夢も／白い頁に折りこめ
その頁頁／夢にくらみ／皎皎／皚皚／舞ひのぼるもの／遂に虚空に満つと

若者にとって、やりたいと願うことはすべて未知の、初めてのことである。この若者ならではの特権、**「未知」の汚れなさ**を檀は高らかに謳い上げる。

詩中の「皎皎」は白い月光、「皚皚」は一面の雪景色を表す言葉で、ともに「汚れが全くない」ことを表す。漢文には更に「皓皓」という表現もあって（美人を「明眸皓歯」ともいう。この「皓」も汚れなき白だ。）、漢字文化の「表現」への意欲の高さには驚嘆させられるが、檀はこれを利用して「まっさら」であるという若者の特権性を強調しているのだ。無頼派作家ならではの、世をすねた所も多くある檀だが、ここには彼の「人間賛歌」のようなものを筆者は強く感じる。これこそが檀の本質だと思うのだ。

この思いは、彼の最晩年、福岡沖の能古島（のこのしま）を「終の棲家（ついのすみか）」と定め、そこに向かう際に娘たちに与えた言葉にも色濃く表れている。前回も載せたものだが、その一部を再掲する。

「まことにみじめではあるが、私たち一人一人に、命という、自分だけで育成可能のなんの汚れもない素材が与えられている。おまえたち一人一人は、その汚れのない一つずつの素材を与えられた、芸術家であり、教育者であり、いってみれば、自分自身の造物主であり、いや、ちっぽけな、哀れな、神ですらあるだろう。」

『虚空象嵌』はこの詩単独の題名であるが、詩集全体の題名でもある。檀にとっては２冊目の著作であり、昭和 14 年２月（27 歳）に出版された。後に無頼派の作家として広く世に知られることになる檀だが、若き日に学んだ学校のメモリアルとしては、これ以上にふさわしいものはないだろう。足女を卒業する３年生も、これから新生足利高校の一員となる１・２年生も、この言葉を胸に深く刻んで、「自分という素材」を丹念に、そして大胆に磨いていってほしいものだ。

この詩碑は、1977（昭和 52）年 10 月に当時の生徒会の発案によって建てられたと聞いている（筆者はこの年の３月に足利高校を卒業したので、これは知らなかった。）。檀一雄は 1976（昭和 51）年の１月に亡くなっている（64 歳）ので、時期としてはごく自然ではある。しかし、高校生の時の自分を思い起こしてみると、果たして檀一雄を知っていたかどうか、甚だ心許ないところなので、どういう経緯で足高生徒会がこれを建てるに至ったのか、少なからず興味をひかれたのである。

これに関連して覚えているのは筆者の足利高校時代の恩師である倉澤昭壽先生（後に足利女子高校の第 21 代校長となった方だ）が、足高に檀一雄の母親が訪ねてきたとおっしゃったことだ。

今回、檀一雄について調べていたら、檀の母親である高岩とみが『火宅の母の記』（新潮社）という書物を 1978（昭和 53）年（この本のもとになった文章は昭和 52 年 10 月、雑誌「新潮」に発表。）に出版している。これと倉澤先生の言葉を合わせて考えると、檀の母親の来校は昭和 51 年か昭和 52 年の前半で（亡き息子のための文章を書くことが決まり、そのための取材も兼ねて足利に来たのではないか、ということ）、それを受け、更に先生方の口添え等もあって生徒会が詩碑の建立を発議したという事情があったのではないか、そう考えたのだ。

実はこの文章を書く直前までこの推測に確信めいたものを持っていたのだが、檀一雄の異父妹で笠耐（りゅう・たえ）という人（この人は物理を専攻する大学の先生で、物理教育に貢献した人を讃える国際的な賞を受賞した人だそうだ。）が 2014 年に出版した『ある昭和の家族―「火宅の人」の母と妹たち』（岩波書店）を読むに至ってギャフンとなった。そこには「檀の母が 1981（昭和 56）年の初夏に足利高校を訪れ、檀一雄の詩碑と対面した」とはっきり書かれてあるからである。この本の「心の宝物―晩年の母」という章の扉には、詩碑と並んだ檀の母の写真が掲げられてあり（２回目ということも一応は考えられるが…）、とにかく 1981 年に檀の母が足利高校を訪ねたのは間違いのない事実のようだ。その時に檀の母は檀一雄が好きだったマロニエと久留米つつじを足利高校に贈ったという（マロニエはやはり文豪の堀辰雄から譲られたものだそうだ）。

檀の母は 1921（大正 10）年９月、一雄が小学校４年生（９歳）のある日に、一雄と二人の妹を残し、前年に生まれた末の妹だけを連れて家を出る。前夜に夫から暴力を受けて（檀の父は嫉妬に駆られて我を忘れたらしい。）母は命の危険さえ感じたようだ。この後、妹たちは九州の実家で育てられることになり、一雄だけが父のもとに残って足利中学卒業（16 歳）まで足利で過ごしたのである。檀の父母は 1923（大正 12）年 11 月（９月１日に関東大震災があった年）に正式に離婚したが、この時、檀の母とみは 30 歳。一雄は 11 歳であった。

檀の母は翌 1924 年春に高岩勘次郎と再婚する。高岩も再婚で、亡くなった先妻との間に３男１女（長男は檀一雄より２歳年長の 14 歳、次男は一雄と同い年の 12 歳だった）があった。とみはこの時点で自分の子４人も合わせて８人の子の母親になったのである。更にとみは夫高岩との間に 12 年間（とみと結婚した時高岩は 46 歳だったが、1935（昭和 10）年には 58 歳で亡くなってしまう）で４男２女を設けている。結果的にとみは 14 人の子を育てたのである。

高岩が亡くなったとき、とみは 42 歳で、一番下の子仁（じん）は生後１か月、その上の耐（たえ。先述した本を書いた人である）は１歳 10 か月であった。この時、一雄は 23 歳。一別以来、ずっと母を避けてきた一雄が友人を介して母と会いたいと言ってきたのは 1933（昭和８）年、東京帝国大学に入学した翌年の初め頃だから、このときからわずか２年しかたっていない。一雄は小説家として認められかけていたが、まだこの先どうなるかまだわからないという時期であった。しかも昭和 10 年といえば翌年 226 事件が起き、日本が戦争に向かっていく時期である。高岩は実業家であったから、それなりに財産はあったと思うが、それが生かせるような時代ではなかった。その中で、とみは福岡郊外に家を建て自ら農地を開拓して子どもたちを養ったようである。先述した笠耐の本の帯には「十四人の子どもたちとともに、厳しい時代を明るく生き抜いた母」とあるが、彼女はまさに昭和の「グレートマザー」であった。

そのようなとみにしても、足利の地への思いは格別のものがあったようだ。長林寺の隣の家は自然豊かで一雄にピッタリということで、とみが見つけ出してきたものだそうだ。ずっと離れていた一雄と一緒に暮らせるようになって、楽しい思い出もたくさんあるらしい。だから、足利高校で若き日の一雄の息遣いが感じられるような詩碑を見た感激は一入（ひとしお）のものがあったに違いない。

足女生もこの詩碑を見たら、檀一雄の思いとともに、心ならずもいとしい息子と離れざるを得なかった母の悲しみにも是非思いを致してほしいと思う。